

# 歴史と民俗34

神奈川大学日本常民文化研究所論集 34

2018年3月9日発行  
神奈川大学日本常民文化研究所編  
発行所 株式会社平凡社

[要旨集]

---

## ■特集 《揺れる沖縄》

### 沖縄占領直後の住民生活

川平成雄

#### 【要旨】

沖縄戦は、生産基盤・生活基盤をことごとく破壊し、沖縄の人たちの「精神」をも破壊した。捕われ、収容された住民は、米軍政府による無償配給で露命をつなぎ、一九四五年一〇月三十一日、旧居住区への帰還が許可される。だが、米軍は各地に広大な軍用地を確保し、立ち入り禁止としていた。

このような状況の中で、住民は米軍政府の援助を受けながらも、経済復興への道を歩み始める。基礎となったのが、食糧確保のための農業・水産・畜産の基盤整備、住居とした規格屋の建設であった。だが、この中には米軍政府の隠された政策意図があった。それは本国政府の逼迫していた財政負担を減らし、可能な限り、沖縄の資源、沖縄の労働力を利用して復興させることであった。つまりは、最小負担での最大限の占領目的追求である。

本稿での主眼は、「戦後」沖縄の原点ともいべきこの時期の状況を探究することにある。

# 「島クトゥバで語る戦世」の二〇年

比嘉豊光

## 【要旨】

「島クトゥバで語る戦世」とは、「琉球弧を記録する会」が、「お年寄りに自らの戦争体験を当時使っていた言葉（島クトゥバ）で語ってもらい、それをビデオカメラで撮影そして上映する」というプロジェクトで、一九九七年に始まった。島クトゥバとは琉球諸語のことである。軍官民共生共死という状況で戦われた壮絶な日米の戦闘に巻き込まれた沖縄住民（軍人軍属も含めて）の戦世の記憶を、母語によって聞き取り、それをビデオ映像で残す。現在までに約千人の記録を撮影することができた。それまで沖縄住民の戦争体験の聞き取りは沖縄県史や市町村史でも行っていたが、すべて日本語でなされ、最終的には活字媒体で残るだけだった。島クトゥバで、そして映像で残すという「島クトゥバで語る戦世」は、戦争体験者そして同時に島クトゥバを母語とする人々が時間の経過とともに減少していくなかで、沖縄の記憶の継承という点で重要な意味を持つ。その意義について二〇年の経緯を振り返りながら述べる。

# オキナワン・ロックをめぐる 沖縄・アメリカ・日本

ロバーソン・ジェームス（訳 泉水英計）

## 【要旨】

オキナワン・ロックは、沖縄市での文化的実践であり、その文化遺産であり、文化資源でもある。本論では、オキナワン・ロックの変遷のなかで「アメリカ」「沖縄」「日本」が複雑に絡み合う様子を論じる。第一節では、オキナワン・ロックとの私的な出会いに触れつつ研究動向を整理し、第二節では戦後沖縄でロック音楽が勃興し隆盛を極めた経過について述べる。第三節では、日本復帰後に沖縄市でオキナワン・ロックが地域活性化のための重要な文化資源として利用された三つの事例を検討する。ここからは、オキナワン・ロックが織り込まれた、複雑に絡み合い時に競合する政治的・経済的権力の基盤と、この現代沖縄の（ポスト）コロニアルな状況のなかでアイデンティティを構築し、同時に、経済的な生き残りをはかることの複雑さを垣間見ることができる。

# 土地と移民——琉球政府ボリビア計画移民の端緒

豊見山和美

## 【要旨】

沖縄は戦前から日本国内で有数の移民送出県であり、一八九九年から第二次世界大戦で移民事業が途絶するまでの間に七万二七八九人が二三余の地域に出移民した〔沖縄県教育委員会 1974〕。第二次世界大戦後は、アメリカ施政権下の琉球政府が「計画移民」として海外移民事業に着手したが、その脈絡は戦前とは大きく異なる。人口急増、軍用地接収による農地等の激減という状況で、脆弱な沖縄群島政府は、困窮する沖縄が抱えることのできる人口を一九五一年時点で四〇万人足らずと試算し、当時で三〇万人となる「過剰人口」対策に海外移民が有効との方針を打ち出した。一方、東西冷戦下で沖縄を恒久的な軍事基地として固定かつ強化する方針を進めるアメリカは、住民の不満をそらそうと、土地の強制収用と移民送出をリンクさせていた。本稿では、アメリカの支援のもとで琉球政府がボリビアへの計画移民を実施した経緯を踏まえながら、一九五〇年代の沖縄の社会状況を「土地と移民」を軸に論述する。

# 日銀から見た沖縄返還と通貨交換

——自衛隊利用、中央省庁の対応など中心に

軽部謙介

## 【要旨】

一九七二年の沖縄返還に伴い、通貨がドルから円に交換された。日本銀行発券局が作成した「沖縄における通貨交換について」は、通貨交換問題に関する「通史」の側面をもつとともに、通貨交換実施に当たった当局がどのように準備を行い実施に移していったのかについての実務上の記録となっている。

この通貨交換で大きな焦点となった自衛隊利用が決まる推移も克明に記録されており、「日銀から見れば」という前提条件は付くものの、なぜ自衛艦が投入されたのかなどは垣間見ることができる。

また、沖縄の本土復帰という歴史的なイベントに際し、通貨交換に関与した一部の中央官庁が様々な理由をつけて責任を回避しようとする姿も浮かび上がってくる。彼らの態度は中央官僚の「作法」を象徴するものだが、「自分たちが責任を負わされるのはいやだ」というロジックは現在の基地負担の問題にも通じるところがあり、本土と沖縄の間に走る溝の原点を見る思いがする。

# コザにおける住民と米兵の多重性

——ロバーソン報告のコメントにかえて

泉水英計

## 【要旨】

越来村／コザは住民と米兵が至近距離で接触する場であり、両者の文化的混濁が、沖縄とアメリカという複数の要素からなる「沖縄」を生んだ。しかしさらに、「米兵」のなかには、他の米兵から区別される黒人兵という存在が駐留地特有の環境によって生み出され、「占領者」のなかには、軍とは一線を画した学術専門家の存在があった。軍民接触の主要な文脈が売買春であり米軍は性病対策に力を入れたが、売春を理由にしたオフリミッツによって、一般住民を巻き込んだ問題に発展した。そもそも基地の街としての戦後復興は、軍用地接収により生活の糧を失った人々の選択肢であり、「越来村民」のうち過半数がそのような人々であった。米軍との利害関係が異なる住民間の対立はオフリミッツを機に範疇を拡大し、他の「沖縄住民」から区別される基地の街の政治的運動として表出した。「沖縄」の複数性は、このように幾重にも重なる複数の要素が構成した多重性でもある。

# 沖縄の国政参政権の 「剥奪」「付与」の近現代史

——新領土の沖縄、権利なき臣民・国民としての沖縄人

後田多敦

## 【要旨】

近現代の日本は戦前の帝国議会と戦後の国会という国政レベルの二つの議会を経験しているが、そのいずれの議会においても、沖縄の参政権をその始まりから一定期間奪ってきた。地域属性による参政権の制限である。段階的に獲得された沖縄の参政権は、敗戦直後の帝国議会での衆議院議員選挙法改正で再び剥奪された。そして、沖縄は日本国憲法制定過程だけでなく、憲法の適用からも排除され参政権のほか基本的人権の保障も奪われた。沖縄人は一九七二年まで、戦後の国民主権の日本国憲法下で実質的に「主権者ではない国民」として位置づけられていた。

本稿では「付与」「剥奪」を繰り返された沖縄の国政参政権を史的にたどり、日本「本土」の「例外」とされることで、国政から排除された近現代の沖縄の位置を検討した。明治日本による「琉球処分」から戦後の米国占領統治下までの日本「本土」と沖縄との関係を国政参政権の事例を通観することで、沖縄の国政参政権を剥奪した方法を示し、「新領土」として日本「本土」と区別し、「無権利の臣民」「無権利の国民」としていた実態を明らかにする。

## ■一般論考

# 柳田国男が描く日本地図

——消される北海道、揺れる沖縄

安室 知

### 【要旨】

昭和戦前期、近代学問への展開を図るには民俗学は、その対象の明確化と方法の整備は不可欠であった。そうした民俗学の学問としての概形がいかにならされていったか、柳田国男が描く日本地図を手がかりとして検討する。

柳田は生涯に一〇点の日本地図を描いている。そのすべてはある特定の民俗事象に注目した民俗分布図である。そうした民俗分布図を重要な手がかりとして柳田は周圏論と海上の道論という民俗文化のルーツに関わる二つの大きな学説を展開した。その発想は、柳田の場合、大きく二つの時期に分けることができる。太平洋戦争の終結前までは周圏論、戦後は海上の道論を説くために民俗分布図が描かれていたとあってよい。

この二つの学説を打ち立てる過程で、日本認識が大きく揺れ動くことが柳田の描いた民俗分布図からは読み取れる。北海道は一貫して柳田にとって民俗研究の対象とはならなかった。それに対し、沖縄については最初は除外されていたが、周圏論の見直しとともに研究対象化され、さらに海上の道論に柳田の関心が移るとともに日本地図の中で沖縄は重要な位置を占めるようになった。



## ■一般論考

# 猿と猩々が守る都市宇宙

——高岡御車山祭のコスモロジー

小馬 徹

### 【要旨】

二〇一六年一二月、全国三三の祭から成る「山・鉦・屋台行事」が国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の無形文化遺産保護条約代表リストに登録された。富山県からは御車山祭（高岡）、神明宮曳山祭（城端）、タテモン祭（魚津）と、愛知県の六件に次いで多くの祭が選ばれ、富山県民のこの種の祭への関心が一気に高まった。その反面、選に漏れた、伝統もあり名声も高い他の幾つかの祭の地元と関係者の落胆振りが痛々しい。その背景には、「無形文化遺産」を「世界遺産」の“無形、版だ”と見る誤解がある。前者が卓越した対象を指定するのに対して、後者は代表例をリストに記載するが、同カテゴリーの他の諸例も等しく価値があると見るものである。だが、日本社会一般の受け取り方は全く別の様相を見せている。文化保護政策の「関節が外れた」と言うべきかも知れない。

この現代の「文化的黒船」とも言うべき「事件」は、社会的次元に止まらず、祭礼や都市民俗の研究次元にも刺激を与えて、従来の民俗学的手法に偏した研究のあり方を再考する、一つの画期の到来をも予測させる。民俗を今も生きた歴史の相で動態的に捉え、かつ個々の「山・鉦・屋台行事」の地域史的な意義をより大きな文脈で考究する必要性が急浮上したように思われる。つまり、同種の祭の起源や発展の時間的・地理的な変異に即した広域的な比較研究を行いつつ、なおかつ、各々の祭に固有な社会・文化的な意義を明晰に抽出することが求められよう。その試みは、都市祭礼研究の新しいパラダイムの模索にも繋がるものと思われる。

小稿は、（加越能）三州随一と謳われてきた御車山祭をこの視点から捉え直し、高岡という極めて独特の歴史的背景をもつ近世都市のエートス（集合的な倫理・心的態度）を、歴史学と民俗学の蓄積を踏まえながら、文化人類学の立場から具体的に、かつ詳細に読み解く一つの試みである。